

第1回山口県地震・津波防災対策検討委員会の議事概要

日時：5月11日（金）13:30～15:35

場所：県政資料館2階 第1会議室

出席者：三浦会長、兵動委員、金折委員、羽田野委員、大年委員、栗山委員

■議事概要

当委員会で行う「地震・津波防災対策推進事業」等について事務局及び河川課から資料説明を行い、各委員が用意した資料により説明した後、意見交換等を行った。

■主な意見等

- 多重防護の対象をハード部分のみとするかソフト部分を含むかどうかなど、多重防護の定義をきちんと整理した方がよい。
- 揺れの継続時間が長いと液状化の検討は必須である。山口の企業の方は、国の想定では、津波に伴う海面上昇の高さは2m以下とされているので、現状の護岸の高さで安心している傾向があるが、考え方を改めて欲しい。瀬戸内海では液状化が起こると考えるべきであろう。
- 宇部市の特性として、古洞（炭坑）が多い。東北で古洞が落ちている、中途半端な埋め方に注意が必要である。
- 海底の活断層として神田岬沖断層（菊川断層の延長上の海底部分）が知られており、詳しい海底地形の分析により、断層の長さはずれの量から津波のシミュレーションが可能である。従来の想定より沖合に長く、見島の南西海岸に神田岬沖断層と同じ方向に走行がある。直線的で西側が低く、縦ずれが予想される。
大規模災害対策検討委員会で提起された南日本海断層帯は、海底地形等を見ながら検討が必要である。
万寿の大津波、浜田地震は資料があるので検討が必要である。
- 近県で対馬海峡東の断層などが日本海の想定震源域とされているので、これら可能性のあるものもすべて対象とすべきである。
- 古文書を全面的に信頼するのは避けるべきで、現地踏査や地勢からの判断が必要である。
- 100年クラスのL1（地震動レベル1）と1000年クラスのL2（地震動レベル2）を地域で決めていくということだが、日本海で起こる地震のL1・L2、南海トラフ沿いのL1・L2の4種類考えるかはこれから検討する事項である。
日本海側については、可能性のあるものを全部あげていく段階である。
- 海岸線を考えると、津波が起きた場合、船を安全に沖合退避させることも考えなければならない。
- 瀬戸内海は水深が浅いので、潮位によっては大型タンカーが海底に接触する可能性がある。津波の初期水位等の条件設定が重要である。